追　悼

大橋広好，大場秀章：木村陽二郎先生（1912–2006）
Hiroyoshi OHASHI and Hideaki OHBA: Dr. Yojiro Kimura (1912–2006)



木村陽二郎先生（前列左），右へ前川文夫，小林義雄，後列左から井上　浩，佐々木一郎，原　寛，黒川　逍，岡田　稔．1978年10月７日，東京大学理学部附属植物園日光分園にて行なわれた植物研究雑誌編集会の折にて（大橋写）．

木村陽二郎先生は1912年７月31日山口県山口市にお生まれになった．お父上の転勤に伴い東京，長崎と移られ，1925年長崎中学入学，中学時代に植物採集に熱中され，植物分類学を学ぶ決心を固めて1929年山口高等学校理科二類に入学，児玉親輔生物学教授の薦めで中井猛之進教授の指導を受けるため，1933年東京帝国大学理学部植物学科に入学した．当時植物学教室は小石川植物園の中にあった．先生は入学の翌年５月に中井教授に分類学専攻の希望を伝え，夏には日本産オトギリソウ科植物の分類を卒業論文のテーマにいただいた．先生の最初の論文「みずおとぎりニ就テ」（英文）を1935年に植物研究雑誌11巻に発表され，1936年卒業，大学院に進まれた．1938年東京帝国大学植物学科副手，翌年牧野富太郎講師が77歳で退職し，前川文夫助手が講師に昇任して，先生が助手となられた．1944年「おとぎりそう科ノ研究」で理学博士を授与された．1949年６月先生は東京大学教養学部生物学科助教授に移られた．先生は「戦後，活字に飢えていた私はアメリカ文化センターの図書館で生物学の本をみて想を練り1948年に「生物学概論」を出版した．この本は仲間内で評判がよく大学で生物学を担当する因縁となったのかと今にして思う」と回想しておられる．先生は1951年には創設された教養学部教養学科で科学史の講義も受け持たれた．1954年に文部省在外研究員としてパリの国立自然誌博物館に留学し，オトギリソウ科の他に科学史の研究，特に植物分類学の歴史を調べられた．1960年に教養学科教授となり，科学史・科学哲学分科を担当された．先生は教養学部総合文化研究科大学院の創設に尽くさ

れ，「私の教授生活の後半は科学史研究を暫くおいても大学院の設立に最も努力を傾注せざるを得なかった．博士課程が認められたときは定年退職の 1 年前であった」と述懐しておられる．1973年に東京大学を退官され，名誉教授となられた．先生は中央大学にも1944年から非常勤講師で勤められ，1949年から専任講師を続け，東大を退官されて1973年に理工学部教授となられ，1977年には法学部教授，1979年の半年間イギリス，フランスに留学，植物分類体系を研究され，1983年中央大学を定年退職された．その後も科学史の研究で国際日本文化研究センターの共同研究などに参加され，また多数の著作を刊行された．惜しむべきことに2000年夏に脳梗塞で倒れられた．奥様からは，ご自宅で平穏にお過ごしであったが2006年 4 月 3 日に93歳で安らかにお亡くなりになったとお知らせいただいた．

木村先生の植物分類学分野での主なご研究はオトギリソウ科であり，1951年「大日本植物誌おとぎりそう科」として集大成された．これは1942年の学位論文であったが，印刷中に初校を残して戦火に失われ，10年後に中井教授が館長でおられた国立科学博物館から出版された．ケンポナシやコゴメグサ属も研究された．植物の分類体系の研究は先生が教養学部生物学科へ移られたことに始まった．「私の研究および教育範囲は生物学と生物学史に広がらざるを得なかった．植物分類学の研究では標本や植物採集とは無関係に研究できる植物の体系の研究へと向かった」（私の仕事　オトギリソウと自然誌）．教養学部の参考書であった小倉謙（編）「生物学」に先生が「植物の体系と系統」の執筆を依頼されたことを端緒に本誌28巻（1953）に「植物の体系と系統樹」を発表された．先生はこの体系を1963年に東北大学理科報告生物学29巻で改訂され，さらに1979年に中央大学から半年間イギリス，フランス留学を許された折りに鞭毛の微細構造などの新知見を採り入れて改良し，1979年にパリ国立自然誌博物館の Revue Algologique N. S. 14 巻に植物界の分類体系と系統関係として発表された．

生物学史分野では特に植物を中心とした自然史（先生は自然誌という語を提唱された）と日本での植物学史に分類学者の目で見た新境地を開拓され，「日本自然誌の成立」，「ナチュラリストの系譜」などの名著を遺された．これらはパリ自然誌博物館に留学した折の研究成果でもあった．日本の植物学史では研究の基礎を築いたツュンベルクの研究を皮切りに，シーボルトと同時代の日本の本草学者に焦点を当てた大がかりな研究を展開された．ツュンベルクでは来日200年（1976），生誕150年（1978）などのスウェーデン・日本での記念シンポジウムに関与し，重要な貢献をした．シーボルトで特記すべきは1994年のシーボルト旧蔵日本植物図集を大型フォリオサイズで複製出版し，その解説をされたことだろう．大場はこの出版でカタログ作成などに協力した．パリ留学中には美術教室にも通い，絵画に造詣の深い先生は植物画にも一家言をもち，その視点で日本での植物画家，植物画史にも言及された．飯沼慾齋，最後の本草学者といわれる白井光太郎などの研究成果も大きい．

先生は優れた健筆家で，平明な文章を駆使され，多数の著書，論文，随筆を発表された．ご自分の分類学に志された経緯，自然誌・生物学史の研究などについても「追記—思い出すまま」（生物学史論集 pp. 415–420，1987年 4 月）や「私の仕事　オトギリソウと自然誌」（日本の生物第 1 巻第 9 号，1987年10月）などに書き残しておられる．巧まざるユーモアも含まれていて，先生のお人柄がよく現れている．金井弘夫（1994）：日本植物分類学文献総目録528–531ページには1935年から1993年の先生の論文，随筆の多くが挙げられている．

先生と本誌とのご縁は深く，1935年以来多くの論文や短報を本誌にご発表になった．また，52年間にわたり本誌編集員を務められた．第22巻第 1・2 号（1948）の表紙カットに編集員として Philosophia Botanica のリンネソウをお選らびになった．1999年前半まで編集会にご出席された．先生は編集会では前川文夫，原　寛，津山　尚先生と活発に論議されることが多かった．それを聞いているのはわれわれの楽しみであった．

大橋は1964年頃東大植物学科で先生の大学院特論を聴講した．先生は講義内容を「種の問題」とするか「進化論の研究」とするか学

生の意見を聞かれた上で，「種」を選んだ学生は1人であったため，ラマルクを中心とした進化論の講義をされた．後に先生は大橋の博士論文審査とドイツ語の試験官であった．先生はフランス語とばっかり思っていたが，ドイツ語はさらにご堪能であった思い出が大橋に強く残っている．後に刊行された先生の多くの科学史の著作を愛読してみて，先生の広い視野に立たれた植物学史研究の基礎もさてこそと感服させられるのが常であった．

先生は長い間東京大学と中央大学に勤められたが，植物分類学の研究室も弟子もお育てにならなかった．大橋が講師・助教授であった昭和46–55年には先生は東大植物学科の大学院教官を兼務されなかったので，植物学科学生は先生を指導教官に選ぶ機会もなかった．

先生の研究は戦争の影響を大きく受けられた．先生は（先生の造語で言えば）「植物種誌」研究の分類学から離れざるを得ず，分類学の後継者を育てる機会も失われたが，しかし，植物全体を高次レベルの体系で示され，日本植物の研究史に新境地を開かれ，さらに科学史の研究教育機関の設置に尽力された．先生のご冥福を心からお祈りする次第である．

Norman K. B. Robson: **Yojiro Kimura's Contribution to the Study of Japanese *Hypericum***

N. K. B. ロブソン：木村陽二郎博士の日本産オトギリソウ属研究への貢献

I first encountered Kimura's *Nova Flora Japonica – Hypericaceae* soon after its publication in 1951, when I was lecturing at Edinburgh University and studying for a Ph. D. (1952–1956). My interest in *Hypericum* had been stimulated earlier by an undergraduate research project at Aberdeen University, and I had been continuing and expanding this study in Edinburgh. Realising the importance of this publication for my work, I attempted to obtain a translation of at least parts of it, at first without success. Eventually, however, I was introduced to a cadet in the Japanese Consular Service in Edinburgh, and together we managed to make a workable translation of the key to Japanese *Hypericum*. This enabled me to place in context his previous papers in English on this subject in the *Botanical Magazine* (*Tokyo*) and the *Journal of Japanese Botany* (1937–1939).

Although now fully aware of the importance – and difficulties – of the Japanese species, I did no further detailed work on them until it became nccessary in 1992 to study them for my monographic study of *Hypericum* (particularly the taxonomy and relationships of section Hypericum) and for the *Flora of Japan* and *Flora of China*. It was already clear that Kimura took a different view of the genus from me, having restricted it to herbaceous species with stamens in fascicles and (except *H. ascyron*) dark hypericin-containing glands, and treated other sections in my classification as genera (*Takasagoya* Y. Kimura, *Norysca* Spach and *Sarothra* L. for the Japanese and Taiwan species). We do agree, however, that *Triadenum* Rafin. is distinct. We also agree that the 'sect. Hypericum' Japanese species consist of two distinct groups, which he named as series Elineata (stems terete) and series Bilineata (stems 2-lined), although Kimura included in the latter Taiwan species ('grex *H. nagasawai*') that I have referred to Sect. Humifusoideum. I have included Japanese series Bilineata ('grex *H. attenuati*') in the mainly western Eurasian sect. Hypericum subsect. Hypericum as series Senanensia and series Elineata in the almost wholly Japanese sect. Hypericum subsect. Erecta.

Within '*series Elineata*' Kimura recognised five greges containing 20 species in all, whereas my subsect. Erecta contains 21